

## 風景計画の視座 —現代に求められる風景計画とは— 平成30年度日本造園学会全国大会ミニフォーラム

小島 周作\* 上田 裕文\*\* 水内 佑輔\*\*\*

### 1. 趣旨説明

上田裕文(北海道大学) 風景計画推進委員会のミニフォーラムは今年で3回目を迎える。昨年までの2回は事例発表表が中心であった。これまで、研究者ごとに多様であった「風景」の概念や手法論に対して、本委員会では風景計画の体系化を目指す。そこで今回は前後半の2部体制で、前半は各委員が考える風景計画について発表して貰い、後半は参加者も交えて議論を深めることとする。なお前半の各委員の発表は、5分という短い時間内で、「風景計画の意義」「風景計画の理論的立場やアプローチ」「具体事例」の3つの視点から発表を行う。

### 2. それぞれが考える風景計画

#### (1) 伊藤弘(筑波大学)

風景計画とは、地域の特徴を表出させ共有する方策である。自然環境-土地利用-文化の重なりの中で、諸要素の関係や要素の位置づけを考え、そこでどう人々が活動できるかという場所作りを展開することではないか。

理論的立場としては、総体と個々の要素、視点場の位置とその整備内容を中心に考えている。各要素に対しては、絶対的な価値と相対的な価値の両面からアプローチするよう心掛けている。

これまでの実践事例として、海岸林が集団表象となるまでのプロセスがあげられる。現在の世界遺産は自然遺産と文化遺産が異なる機関に評価・指定され、各構成要素がバラバラに捉えられる傾向にある。行政においては、有体物のみを評価する傾向にあるため、指定機関の評価に惑わされず、(まなざしも含めた)立体的な造園の視点から捉え直すことが重要である。

#### (2) 水内佑輔(東京大学)

風景計画には2つの方向性があると考えている。近代において永見健一は風景計画とは「風景地休養計画」の同義略語であるとした。このようにレクリエーションや、国立公園に通ずるもので、個人に還元される風景体験の提供が目的とされるものである。もう一つ最近の方向性として、まだ上手く定義づけられていないが、「地域社会空間計画または地域空間資源化計画」と言った響きであり、地域づくりに役立つ風景づくりを目的とする2つの方向性があるのではないかと、価値付けの多様化を最近強く感じており、

\*東京農業大学大学院農学研究科造園学専攻 \*\*北海道大学観光学高等研究センター  
\*\*\*東京大学大学院農学生命科学研究科

文化的景観や景観計画などが当たり前になってきた中で、風景の価値が相対化されやすくなっている。こういった中で、空間や場所の意味をどう読み解き、風景として価値付けを行い、共有させていくかが今後の課題である。

以上の問題意識から、これまで歴史・計画研究に取り組んできた。例えば神社や里山など日本の従来の伝統的な風景が、近代風景計画の中でどのように評価されてきたか。また、環境アセスメント等の景観分野で眺望景観中心である一方で、圍繞景観的風景体験をどのように把握・評価していくかを考えている。具体的な研究としては、田村剛の国立公園論について研究を重ねて来た。田村は、自然風景を対象としたアメリカの国立公園の制度を日本に適用したので、神社等の伝統的な風景が対象になることはなかった。一方で、同時期には郷土風景という言葉で農村や現代でいうところの里山的空間への関心もあったが、体系化されることはなかったということ述べたい。

#### (3) 田中伸彦(東海大学)

里山のような空間をどのように多くの人々が訪れてくれる空間にしていくか、という点から風景計画について今まで考えてきた。観光学の観点からは、森羅万象から観光資源として認識して、それを観光の対象として人々に来てもらい、産業化して成功化させるというプロセスが必要になってくる。

理論的立場としては、篠原修先生の景観把握モデルを基軸に考えることが多い。「人に評価される風景」とはシーン景観の積分形であり、シーン景観からシークエンス景観、場の景観、変遷景観へと積み上がるという考えに立脚している。また、篠原先生の景観5原則の一つである他力本願の原則が、今後の風景計画にとってキーワードになると受け止めている。

自身が行った具体事例を3つ挙げる。まず景観把握体験を担保すること。視点場整備の意義を実証し展望台整備等の活動を実践してきた。次に、空間時間的要素を分析すること。例えば同じコナラの景観を撮影し続け、気象条件の変化等により景観の見え方がどのように変化してきたかを検証してきた。最後に、記憶・類推に働きかけること。皆が同じような風景評価を行うことに興味を持っており、「吉沢八景選定プロジェクト」等の社会活動に取り組んできた。

#### (4) 松井孝子(プレック研究所)

今日は実務者として風景計画について考察してみたい。風景計画というツールをどのようなスケールの計画にも応用していくべき、というのが基本姿勢である。その中で、「変化する風景」を如何に捉えるかが実務レベルの課題である。しかしながら、風景の概念自体も変化していると考えている。例えば、1980年代あたりから高度経済成長期に

表出した諸問題を解決する手段として、訳語である「景観」の用語と概念が広がった。一方で「風景」という用語は明治期頃に使われ始め、アルピニズムに代表される新しく発見された風景を大衆化していくプロセスの中でその概念も広まった。しかし、我が国では古くから「景色」という用語が支配的であり、「景色」は人の心のありようも含むより広い概念を有している。今後の風景計画は「景観」→「風景」→「景色」へと遡ろうとする概念の広がり如何に対応していくかが重要になる。

理論的立場としては、①社会や時代の変化②視点場と視対象の関係の変化③体験や働きかけの変化④自然の営力による変化、等々によって目まぐるしく変わる風景をどのように捉えるかが課題となり、その新しい手法・技術の開発が期待されている。特に、④の変化に対して実務レベルで有効なツールがないと感じており、研究に期待したい。

未来の社会的ニーズに対し、風景計画の手法がどのように役立つかを考える事が、今後重要になるだろう。

#### (5) 小林昭裕 (専修大学)

人間が自然に働きかける活動の変化によって生態系の構造と機能は変化する。このことは生態系サービスに変化をもたらし、人間の豊かさや幸せに影響を及ぼす。この図に示された往還・循環的關係を解明することが風景計画の基本にあるべきであろう

人間と自然とのかかわりにおいて「コンテクスト」の理解は重要であるが、「センス」と「メディア」の観点を合わせて取り入れることが風景計画に求められる。「コンテクスト」では、時代・場所等の変化によって、文化的背景をもとに解釈が生成されることで、まなざしや意味が表出、消失する点に着眼する。次に「センス」では、感覚として捉える人間の認識を客観化し、これを把握する手法の展開が求められる。「メディア」では、技術進歩の観点から、文字・絵画に始まり、ウェブ・メディアの現在まで、人と自然、人と社会、人と人の関係性のダイナミズムを捉える視点を提供する。そして、「コンテクスト」、「センス」と「メディア」において、造園学以外の関連領域との接続が求められる。

この3つの概念は別々ではなく、インタラクティブに考えて行く必要がある。例えば「コンテクスト」の中で新しい造園的な意味や価値が発見され、「メディア」を通し、社会の中で共有され、意味や価値が積層されて具現化されてきた。また、「センス」の客観化は、新たな「コンテクスト」を生成する論拠を提供しうる。このように相互に関連しながら風景は生成・変化してきたことから、従来の分析的視点に包括的視点を加えた両眼から風景計画を捉える必要がある。

#### (6) 寺田徹 (東京大学)

都市近郊の里山の研究を行ってきたが、風景計画においても、ランドスケープ的な見方が大事になってくる。都市近郊の里山は、市街化調整区域や近郊緑地特別保全地区等の都市計画制度で緑地として確保されてきたが、人の手が入った風景ではない。また現在残存している人の手が入った里山の風景も、人々に認知されないまま縮小・消滅していく可能性があることも問題である。そもそも、里山を再生した状態とは何なのかイメージ出来なかった。しかし、実際に手が入った里山風景を体感することで、里山再生の具体イメージが湧いたという個人的体験があり、実空間で里山風景を認知させることが重要なのではないかと。

里山にはダイナミックな再生が必要とされるが、現在研究として、里山風景の30年間分のモニタリング調査を行い、社会経済的な状況の変化によって「風景が動いている」ことを可視化させる取組みを行っている。また、認識のみでは里山再生は出来ないため、現代的な里山資源利用を再生させていく取組みも行っている。

都市近郊の里山を巡っては、4つの概念的な対立（「開発-保護」「保護-保全」「保全-利用」「開発&保護&保全&利用」）がみられる。一つの地域に対して緑地計画と風景計画を別個に取り組むことはナンセンスであり、多元的価値観を考慮しなければ里山の問題は解決できない。

#### (7) 高山範理 (森林総合研究所)

当たり前であるが、風景計画には、診療内科等に見られるような明確な基準やマニュアルは見られない。しかし、関連する既往研究は数多くあることから、そろそろ過去の知見を取りまとめ科学的なエビデンスを基礎に、実践例を加味したマニュアル等として次世代に受け渡していくことが、「現代に求められる」風景計画の意義のひとつではないかと考えている。そのような思いから、最近、得られた知見を如何に現場（地域）に活用し、再度研究にフィードバックさせるかという、研究と実践のPDCAサイクルに着目し、その成果を環境心理学の教科書等に取りまとめる作業を行っている。

また、この点で、我々風景計画に係る研究者は、単に研究成果をアウトプットするだけでなく、過去の多くの研究成果を踏まえつつ、さらにコンセプトメイキングやプランニング、デザインの現場にも、もう少し積極的に関与すべきだと考える。

一方、個人的な理論的立場としては、環境心理学的の理論や調査手法を主に用いている。これまでに、自然環境から刺激を受容すると主体である人間はどのような反応を示すのか、という観点（Zubeの精神物理モデル：S-Rモデル）を中心に調査・実験を重ねており、さらに近年はその知見を現場にフィードバックさせる手法についても研究対象としてきた。森林環境のデザインを例に挙げると、樹

木の密度などの差異によって、人々が享受するリラクゼーション効果などの心身に対する影響を把握し、他の知見の情報と併せて高齢者利用施設の庭のデザイン・設計に応用するなどの実践を行っている。

このように研究と実践を結びつけた活動を行い、その成果を記録として残していく姿勢こそが今後の風景計画に携わる研究者には求められるのではないかと考える。

#### (8) 温井亨 (東北公益文科大学)

これまでの風景計画研究には歴史の分析が不足してきた。それは里の風景研究が近年ようやく始まったからである。2013年に都市史学会が、建築史と日本史の学際研究の発展の上に設立されたが、農村において同様の動きがないのは造園における里の風景研究が空白だったからだろう。里の風景と言えば、重要文化的景観の選定で文書・絵画史料の残存が必要とされる向きがあるが、我々としては風景自体を史料とする方法論を目指すべきではないか。風景の発見は、内面の発見などと共に近代の所産だが、明治後半から大正にかけて、独歩や柳田、今和次郎は無名の個人の側から風景を捉えていた。同時期に生まれた都市計画が、都市の人口流入に対処するための操作の体系であったのに対し、今必要なのはそこに帰り、国家や資本から地域の共同的想像力に風景を取り戻すことであり、それが風景計画の役割ではないかと考える。

#### (9) 町田怜子 (東京農業大学)

現在所属している学科は地域創生科学科という名称で、地域で活躍出来る人材の育成に取り組んでいる。学生に地域づくりについて教える際、ランドスケープ的な視点が非常に役立っている。今日はそのような観点から風景計画について考察していく。

鈴木忠義先生は、地域を学びのフィールド圏に捉えて計画に取り組む重要性を説いていた。進士五十八先生は、地域づくりには我々専門家が具体的実践的提言能力を向上させる必要があることを示した。恩師である麻生恵先生は、地域に学生を取り入れることは地域側にも魅力の再発見等の効果があり、その点に風景計画の社会的意義があると考えた。

一方で大学と地域の関わり方には課題もある。大学は学生が毎年更新されるが、地域は不変的であり、学生の教育と進展する地域づくりのギャップを如何に解消していくべきか。学部生は演習等を通じて地域の魅力や課題を学び、次第に地域貢献の意欲が湧いてくる。院生レベルになると研究データが蓄積され実際の地域づくりに活かされる。このような学生教育のステップを、教育者でもある大学教員が上手く地域づくりや風景計画に活用する必要がある。

#### (10) 上田裕文 (北海道大学)

まず風景学は「ポスト景観学」と位置づけられる。トップダウンではなく、ボトムアップ・参加型のまちづくりの重要性は一般社会に浸透してきた。このまちづくりの論理を支えるものが風景学であると考えている。開発を支えてきたのが認識論的アプローチである景観研究であるならば、まちづくりを支える現象学的アプローチとして風景研究が位置づけられるであろう。

風景は空間・表象・個人・社会の動的な関係として捉えるべきである。研究者ごとに風景モデルには若干の差異があるが、概ねこの4つの関係性で説明できると考えている。また、時代の中で、個人表象と実空間などの間に様々な乖離が生じてくるが、その乖離を積極的につなぎ直すことが風景計画に求められる。

具体事例としては、風景の動的な関係性を捉えるために風景イメージスケッチ手法を研究に用いたり、実践の場として、様々な地域の価値を編集して計画や制度に落とし込む取り組みを行ったりしている。特に最近では墓地空間に力を入れており、墓地に求められる今日の社会的なニーズと実際の墓地空間の乖離をつなぎ直し、空間計画・デザインに反映させている。

### 3. ディスカッション (ファシリテーター：伊藤)

**武田重昭 (大阪府立大学)** 上田先生の示した風景モデルが参考になると考えるが、そこに時間的な概念を取り入れるとどうなるのか？

**上田** 「空間・表象・個人・社会」の各概念が時間の中で循環していくものと考えている。例えば個人の認識がSNSで発信されることで社会表象につながり、やがて空間にも反映されるなどというプロセスが考えられる。

**武田** ランドスケープは自然を扱う以上時間の変遷の中で変化していくことが当たり前であり、その変化のベクトルをより良い方向へコントロールしていくことが重要ではないか。人口減少下のまちづくりでは、「今日より少し良い明日」のような緩やかな変化が求められる。

**松島肇 (北海道大学)** これまでは景観評価の視点で共通解としての集団表象された風景を重視してきたが、これからは個々人の生活景(個人表象)を可視化することが重要ではないか。個人表象を景観アセス等に反映させる方策が必要である。

**渡辺貴史 (長崎大学)** そもそも「計画」とは何なのか。加納治郎は、『計画の科学』(1963)の中で計画の5要素(対象、主体、目的、手段、構成)を提唱している。先の捉え方は現在の計画にも活用できるものと考えられ、風景計画に係る研究・実践する際にも意識する必要があると思う。風景計画を実践する際に気をつけるべきことは、風景を形成すること自体が目的とならないことである。先の事

態を避けるためには、目的(風景形成を通じて解決・改善したい社会問題)と手段(風景形成)が逆転しないように、社会問題解決・改善志向型の風景計画が求められる。

**伊藤** これまでの話題提供を受けて、会場の皆さん含めてご意見を頂く。

**島尻茂樹** 「風景」とは「景色」に色がついたロマンチックなもので、物理的な空間に人の「杓」をはめて風景が形成される。その風景を操作することは困難であるが、ふるさとの人の手が入った風景を取り戻す態度が必要である。風景に「優しさ」や「夢」を含められれば良いと思う。

**上田** 渡辺先生の風景の目的化の話だが、景観が目的なのではなく、景観に付与されている価値とセットにして、「風景」として取り扱えば、都市や景観の目的化から脱却出来るのではないかと。

**渡辺** 風景計画学を社会に発信する際には、社会に学の必要性を受容してもらえよう、風景の価値に係るキーワードや価値ある風景をつくる大義名分の説明が必要である。

**伊藤** 松島先生から集団表象よりも個人表象が大事という話で、都市計画は「ヒト不在の計画」と揶揄されるし、近年の景観計画におけるプレイスメイキングの概念も、人が介在する観点が欠落している。風景の中で人が関与していく様を図示出来れば、肩身が狭い状況から脱却出来るのではないかと。恩師である熊谷先生は、「風景は目標でもあり手段でもある」といつも仰っていた。目標像をどのように共有し、その過程で課題なども明らかにしていく。その方策が風景計画なのではないかと。

**松井** 風景という現象や捉え方は時代毎に変化してきたことは共通認識であることが実感した。その上で、ハゲ山が燃料革命を受けて森林に変化したことや、高度経済成長期を受けて「景観」が表出したことのように、風景の変化の仕方が、我々より前の世代は非常にドラスティックであった。それに対し、現在は「いつのまにか変わってしまう風景・景色」であり、これに対してツールとして風景計画はどのように役立つのか。また、風景という現象の捉え方が、昔の人は共通点が多かったのに対して、情報社会の現代においては非常に多様で且つ急速に変化している。この状況下でどのように人々に満足される風景を創出していくか、この点においても風景計画の意義・役割は大きい。

**田中** 風景は、食事や音楽などと同様に五感を駆使するものである。しかし食事や音楽は一個人が独立的に体験するものである一方、風景だけは、集団が関わりパブリックの性格が強い。そのため、個人個人の好き嫌いを押しつけ合うことが非常に困難である。だからこそ、計画が必要であると考えている。風景計画研究としては、理想としての個人的風景観を提唱するだけでは不十分で、その実現化までの方策を示すことが大切である。しかし実際は多くの研究

が分析的アプローチに留まるため、社会実験なども取り入れた包括的なアプローチが求められている。

**温井** 数年前の造園学会誌における欧米の風景条約の解説において、美しい風景の創出が目的ではなく、人間と環境の良好な関係の構築が目的であり、その結果として、美しい風景が創出されるという旨が示されていた。

先ほどの「風景計画は目的か手段か」の議論と共通点が多いのではないかと。先ほどの食事つながりで、2018年2月に京都で和食文化学会が発足した。和食を捉えるために、非常に幅広い学術分野が参画している。「食」も風景計画の守備範囲の一つであり、関連学会の動向は見本にするべきだと考えている。

**伊藤** 今欧州では葡萄酒の中にあるワイナリーを活用したツーリズムが盛んである。確かに、視覚としての風景のみならず、味覚など身体的感覚から受容する風景も今後受容であろう。

**温井** 例えば先ほどの和食文化学会では、農産物を観光利用することで風景に還元された事例が複数報告された。このように、食と風景は不可分な関係であり、我々ランドスケープの分野が担う部分は大きい。

**小島周作(東京農業大学大学院)** 先ほどの、集団表象よりも個人表象の方が今後は大事という話について、一つ疑問が生じた。例えば現在話題の京都大学の立て看板の件は、集団表象された京都の風景に対し看板がそぐわないという立場で撤去されたと考える。しかし、地域の方々は個人表象として看板に愛着を持っていたとすると、集団表象と個人表象の対立が起こることになる。このような対立に対して、風景計画はどのように対応するべきなのか？

**伊藤** 京大の立て看板の件は、詳しくは不明だが、行政対応の問題である。行政側は、看板という物があるかないかという基準で、撤去という措置を図った。この行政側の対応と、集団表象・個人表象の関係性は調査する必要があるかもしれない。

**水内** 個人表象と集団表象のどちらが重要か、という話ではなくどちらも重要である。その上で、集団表象はスケールが論点となってくる。例えば国立公園は全国レベルの集団表象である。また、都市近郊の里地里山地域ではその地域の集団表象が必要となる。このように、各スケールに対応した集団表象の創出が重要になるのではないかと。

**上田** 日本においては土地の所有権が優先されるように、個人表象と集団表象の対立の件は非常にクラシックな課題である。風景とはプライベートなものかパブリックな公共財なのか、という長年の議論があるが、これまでの我々の立場としてはパブリックなものとして、集団表象の形成に重点を置いてきた。しかし実際には、時代を経て地域のシンボルとなった京都タワーの事例があるように、個人表

象が集団表象へと変化していくような長期的な時間軸の視点も、風景計画には必要だろう。

**伊藤** 議論は尽きないが時間になったのでディスカッションは終了させて頂く。最後に、風景計画研究推進委員会委員長の古谷先生に総評を頂く。

**古谷勝則(千葉大学)** 風景計画研究推進委員会は今年で4年目を迎え、ひとまずのまとめをしたいと考えている。「風景とは?」「風景計画とは?」というテーマはとてもまとめられるものではないが、価値観や風景の捉え方の多様化、人と自然の関係を扱う学問であること、等々はこれまでの議論で共通認識となり、実践的な風景計画の発展に貢献してきたと考える。風景計画推進委員会では、これまでの活動の成果として、「実践 風景計画学(仮)」という教科書を出版予定である。風景計画に関する書籍はこの10年間発刊されておらず、その10年間の変化を踏まえた内容になっている。最後に、第1回のミニフォーラムで東京大学の下村先生が述べていたランドスケープリテラシーの獲得にむけて、本委員会の活動が貢献出来ればと考えている。

#### 4. ミニフォーラムを振り返って

風景計画とは、従来の景観計画が配慮してこなかった人々のまなざしを含めた、より一層包括的な空間づくりの方策であることが、これまでの推進委員会の活動を通じて関係者間で共通認識となってきたと言えるだろう。

しかしまなざしを含める上で、昨今の情報媒体の多様化、それに伴う人々の価値観の多様化は、計画的な立場からみると非常に厄介である。従来の景観計画では、例えば里山など集団表象された風景を目標像に設定してきたが、これは言わば「最大多数の最大幸福」の論理を盾にしてきたものである。しかし少数派の、個人表象された風景も配慮するとなると、集団表象や計画全体との整合性を図ることが極めて難しい。実際里山においては、耕作放棄された農地・山林の風景を「荒れた」と問題視する多数派の集団と、「みどりが豊か」と評する少数派の集団との隔離が見られる。このような隔離を如何に埋めて行くか、そもそも埋める必要があるのか、今後議論していく必要があるだろう。

そして最後に、文化的景観や都市計画、国立公園など空間形成を司る諸計画・制度を取りまとめる総合計画として、風景計画に大きな期待を抱くことが出来た。風景計画の今後の発展に期待したい。

なお、本稿は平成30年度日本造園学会全国大会ミニフォーラムでの議論を編集したものである。(原稿作成 小島周作)